特別取材

第４回「もしもし検定」指導者級養成講座 講演会

木原秋好 講師

「放送における コミュニケーション力の育成」

日本電信電話ユーザ協会主催の第4回「もしもし検定」指導者級養成講座が、8月10日（月）から行われた。初日には、（財）NHK放送研修センターの木原秋好氏による「放送におけるコミュニケーション力の育成」と題した特別講話が行われた。その模様を掲載する。（文責：編集部）

メッセージを視聴者に対し筋道立てて時間内に伝える

私は、NHK放送研修センターの日本語センターでNHKの職員研修を行っているが、時代とともに放送内容が変化し、研修内容も変わってきている。そんな中でアナウンサーは、「日本語の話し言葉のスタンダード」ということを意識しながら日常業務を行っており、その職務の基本を知ることには大きな意味がある。アナウンスメントの技法には多くのバリエーションがあるので、その主だったものを見ることで、話し言葉のスタンダードの一部に触れることができると思う。

放送は、不特定多数の方に、一時に、リアルタイムで、たくさんの情報を与えることができる。NHK－BSで放送している「おーい、ニッポン」は、その特質を生かした番組である。ある日、群馬県を取り上げた回で、生放送中に雷が落ちて中継が不可能になってしまった。復旧まで東京のスタジオだけで放送を続けるしかない。そんな中で、キャスターを担当していた上田早苗アナウンサーは、番組の趣旨の「日本人の感じる故郷の心地よさを、素材を最大限に生かして味わってもらう」ためには、今目の前で起きていることを通して群馬県を表現するべきだと考えた。そして、機転をきかせて雷の話題を取り上げて、スタジオのゲストと見事なトークを展開して難局を乗り切ったのだ。

上田アナウンサーは「キャスターはいろいろな素材を一番おいしく料理し、いいタイミングで視聴者に届ける料理人」だと語っている。そのためには、「メッセージを、視聴者に対して、筋道を立てて、時間内に伝える」ことが必要であり、これこそがパブリックスピーキング※の基本なのである。

原稿を音声化するのではなく伝えるべきことを理解して読む

NHKの新人アナウンサーは、どんな研修を行っているのだろうか。まず「ニュースを読む」ことについては、原稿を読むだけでなく、あえて原稿を見ずにニュースを伝える訓練を行っている。原稿を音声化するのではなく、伝えるべきことは何かを理解して読むことが大切だからだ。

事故などのニュースでは続報も入る。そこでは新しく伝える内容をよく理解しなければならない。武田真一アナウンサーは、「信頼されるニュースの伝え手は、何が新しい情報かを把握している」と語っている。アナウンサーは文章が読めるだけでなく、その背後に何があるのかまでとらえて伝えなければならない。また、安心感を与えるような伝え方も、ニュースを読むための極意である。

番組のナレーションなどでは、作品としての完成度が求められることもある。教育テレビの「世界美術館紀行」のナレーションを担当した石澤典夫アナウンサーは、「まず黙読すること。文章全体の構成、言葉のかかわり具合や意味、映像や音楽との関係など、全体像をつかむことが大切なのです」と語っている。

そこで重要なのがイントネーションだ。たとえば「白い壁の家」という場合、「白い」と「壁の」の間を切ってはいけない。「白い」は「壁の」にかかる言葉で、そこで間をあけると「家」にかかっていると誤解されるからだ。これに対して、「白い大きい家」という場合には、「白い」は「家」にかかる言葉で、「大きい」にはかからないから、「白い」と「大きい」の間は切るべきだ。

また「語アクセント」というものがある。たとえば「橋、箸、端」などで、それぞれアクセントの型が違う。アナウンサーは言葉ごとにこれらの型を覚えなければならない。これらは前後の文脈から判断することもできるが、正しく発音しないと、相手が理解できないこともあるので注意が必要だ。

あきらめずに答えを待ち相手に迫る

アナウンサーにとって実況も大切な能力だ。NHKの新人研修では、地震の揺れの即時描写を行わせて実況の能力を養っている。実況は、目に見えるものをすべて描写すればいいというものではない。伝えるべきメッセージによって、必要な描写と不要な描写が決まってくる。

テレビの高校野球中継の実況では、最低限の言葉を選んで描写する。しかも、見ている人の関心をそらさず、期待を持たせる描写を心がける。そうした実況の能力は、しゃべり込みによって身につける。また、パターンで伝えることも基本になる。野球なら「ピッチャーが投げた」「バッターが打った」「5回の表。得点は1対1」というようなパターンをつくって、それを基本に実況を行う。さらにパターンができたら、今度はそれを崩すことも必要になってくる。

受講者とのやり取りも交えながら進められた講演のようす。

アナウンサーにはインタビューという仕事もある。相手からよい話をたくさん引き出さなければ、質の高い番組にはならない。渡邉あゆみアナウンサーは、「心の時代」という番組である作家にインタビューした際に、「亡くなった息子さんは今、どこにいるのでしょう？」という質問をした。予想もしない質問に作家はとまどい、答えることができなかった。こうした場合には、あきらめて次の質問に行くことが多いのだが、彼女はひたすら待った。相手の心が解けるのを待って、「私の周りにいるんですよ」という答えを引き出すことに成功したのである。

このように放送におけるインタビューでは、あきらめずに答えを待って、相手に迫っていくことが求められる。わからないことを聞く、相手の話したいことを引き出す、そして聞いて深める。それがインタビューである。

「話し言葉のスタンダード」の役割を果たす

ニュース、イントネーション、実況、インタビューについて述べてきたが、これらを成り立たせているものは、受け手と伝え手の双方向のメディアリテラシー※だと思う。放送では双方の了解に基づいて、さまざまな実像に迫ったり、情報を伝えることができる。

そこにはプライバシーや価値判断などの問題があり、不祥事やトラブルが起きることもある。放送事業者にとって避けて通れない視聴率の問題もある。

また、放送事業者は、視聴者にもっと放送について正しく理解してもらいたいと考えているし、視聴者も放送事業者に対して厳しい批判の目を向けることがある。両者はそうした緊張関係にある。

放送におけるアナウンサーの言葉も、まさにそうした状況の中でひとつずつ選ばれたものだ。緊張関係の中で放送をすることで初めて、アナウンサーは「日本語の話し言葉のスタンダード」という役割を果たすことができるのである。

※パブリックスピーキング：人前で話すこと。とくに私的な場ではなく、公的な場で話すことをさす。

※メディアリテラシー：メディアの本質を正しく理解し、適切に利用する能力のこと。

(財)NHK放送研修センター 理事
日本語センター長
「電話応対技能検定委員会」委員

木原秋好（きはらあきよし）氏

長崎県出身。元ＮＨＫアナウンサー。2002年アナウンス室長。2005年ＮＨＫ放送研修センター日本語センター現職。「実践はなしことば講座」「素敵なはなしことば」など、ことばをテーマにしたテレビ・ラジオ番組を制作。著書に番組テキスト「はなす きく よむ」「ことば力アップ」共著、NHK出版協会刊など。